

# 藪の中

芥川龍之介

青空文庫



## 檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違ちがひ  
 ございませぬ。わたしは今朝けさい何時いつもの通り、裏山うらやまの杉すぎを伐きりに  
 参まゐりました。すると山陰やまかげの藪やぶの中なかに、あの死骸しがいがあつたのでご  
 ざいます。あつた所ところでございますか？ それは山科やましなの驛路えきろから  
 は、四五町程ちやほゞ隔へだたつて居をりませう。竹たけの中なかに瘦やせ杉すぎの交まじつた、人ひ  
 氣とけのない所ところでございます。  
 死骸しがいは縹はなだの水干すゐかんに、都みやこ風ふうのさび烏帽子ゑぼうしをかぶつた儘まま、仰あ  
 向けをむに倒たふれて居をりました。何なにしろ一ひとかたな刀なたとは申まをすものの、胸むなも

との突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございませぬ。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから——さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございませぬ。何、

馬うまはゐなかつたか？ あそこは一體馬たいうまなぞには、はひれない所ところで  
 ございます。何なにしろ馬うまの通かよふ路みちとは、藪やぶ一つ隔へだたつて居をりますか  
 ら。

## 檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸しがいの男をとこには、確たしかに昨日きのふ遇あつて居をります。昨日きのふの、――  
 さあ、午ひるごろ頃ころでございませう。場所ばしょは關山せきやまから山科やましなへ、參まゐら  
 うと云いふ途とちう中ちゆうでございます。あの男をとこは馬うまに乗のつた女をんなと一ひとしよに、  
 關山せきやまの方ほうへ歩あるいて參まゐりました。女をんなは牟む子しを垂たれて居をりましたか  
 ら、顔かほはわたしにはわかりませぬ。見みえたのは唯ただ萩はぎ重かさねらしい、

衣きぬの色いろばかりでございます。馬うまは月毛つきげの、——確たしか法師ほふし髪がみの馬うまのやうでございました。丈たけでございますか？ 丈たけは四寸よきもござい  
ましたか？ ——何なにしろ沙門しゃもんの事ことでございますから、その邊へんは  
はつきり存ぞんじません。男をとこは、——いえ、太刀たちも帯おびて居をれば、弓ゆ  
矢みやも携たづさへて居をりました。殊ことに黒くろい塗ぬり籠えびらへ、二十あまり征そ矢やをさ  
したのは、唯ただいま今いまでもはつきり覺おほえて居をります。  
あの男をとこがかやうになろうとは、夢ゆめにも思おもはずに居をりましたが、  
まことに人にんげん間の命いのちなぞは、如に露よやくによでん 如に露よ亦ち如が電でんに違ちがひございませぬ。  
やれやれ、何なんとも申まをしやうのない、氣きの毒どくな事ことを致いたしました。

### 檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄  
 丸と云ふ、名高い盗人でございます。尤もわたしが搦め取つ  
 た時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の  
 上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？ 時刻  
 は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時  
 にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。  
 唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。  
 さやうでございますか？ あの死骸の男が持つてゐたのも、――  
 では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございませぬ。  
 革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、――これは

皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい、馬も仰有る通り、法師髪ほふしがみの月毛つきげでございませう。その畜生ちくしやうに落おとされるとは、何かの因縁いんえんに違ちがひございませぬ。それは石橋いしばしの少すこ先さきに、長い端綱ながはづなを引ひいた儘まま、路みちばたの青芒あをすすきを食くつて居をりました。この多襄丸たじやうまると云いふやつは、洛中らくちゆうに徘徊はいくわいする盗人ぬすびとの中なかでも、女好きをんなずのやつでございませぬ。昨さくねん年の秋鳥部寺あきとりべでらの寶頭びんづるうしろやまの山やまに、物詣ものまうでに來きたらしい女房にようぼうが一人ひとり、女の童めわらはと一ころしよに殺ころされてゐたのは、こいつの仕業しわざだとか申まをして居をりました。その月毛つきげに乗のつてゐた女をんなも、こいつがあをの男をとこを殺ころしたとなれば、何處どこへどうしたかわかりませぬ。差出さしでがましようございませぬが、それも御詮議ごせんぎ下くださいまし。



## 檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸しがいは手前てまへの娘むすめが、片附かたづいた男をとこでございます。が、都みやこのものではございませぬ。若狭わかさの國府こくふの侍さむらひでございます。名なは金澤かなざはの武弘たけひろ、年としは二十六歳さいでございました。いえ、優やさしい氣き立てだてでございますから、遺恨ゐこんなぞ受うける筈はずはございませぬ。

娘むすめでございますか？ 娘むすめの名なは眞砂まさご、年としは十九歳さいでございます。

これは男をとこにも劣おとらぬ位勝氣くらぬちきの女をんなでございませぬが、まだ一度ども武たけひ弘ほかの外ほかには、男をとこを持もつた事ことはございませぬ。顔かほは色いろの淺あさ黒くろい、左ひだりの眼尻めじりに黒子ほくろのある、小ちひさい瓜實うりざね顔がほでございます。

武弘たけひろは昨日きのむすめ娘と一しよに、若狭わかさへ立たつたのでございませうが、  
 こんな事ことになりますとは、何なんと云いふ因果いんぐわでございませう。しか  
 し娘むすめはどうなりましたやら、婿むこの事はあきらめましても、これだ  
 けは心配しんぱいでなりません。どうかこの姥うばが一生しやうの願ねがひでござい  
 ますから、たとひ草木くさきを分けましても、娘むすめの行方ゆくへをお尋たづね下さい  
 まし。何なんに致いたせ憎にくいのは、その多襄丸たじやうまるとか何なんとか申まをす、盗人ぬすびと  
 のやつでございます。婿むこばかりか、娘むすめまでも、………  
 入りて言葉ことばなし。)

(跡あとは泣なき

## 多襄丸の白状

あの男を殺したのとはわたしです。しかし女は殺しはしません。

では何處へ行つたのか？ それはわたしにもわからないのです。

まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されません。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えた

のです。わたしはその咄嗟とつさの間に、たとひ男は殺しても、女は奪をんなうばはうと決心けつしんしました。

何なに、男を殺すなぞは、あなた方がたの思おもつてゐるやうに、大たいした事こと

ではありません。どうせ女を奪をんなうばふとなれば、必かならず、男は殺されるの

です。唯ただわたしは殺す時に、腰こしの太刀たちを使つかふのですが、あなた方がた

は太刀たちを使つかはない、唯ただ権けん力りよくで殺す、金かねで殺す、どうかすると

お爲ためごかしの言葉ことばだけでも殺すでせう。成なるほど程ち血ながは流れない、男をとこ

は立派りつぱに生きてゐる、——しかしそれでも殺したのです。罪つみの深ふか

さを考かんがへて見みれば、あなた方がたが悪いわるか、わたしが悪いわるか、どちら

が悪いわるかわかりません。(皮肉ひにくなる微笑びせう)

しかし男をとこを殺ころさずとも、女をんなうばを奪ことふ事ことが出来できれば、別べつに不足ふそくはな

い譯わけです。いや、その時ときの心こころもちでは、出來できるだけ男をとこを殺ころさずに、女をんなを奪うばはうと決けつ心しんしたのです。が、あの山やま科しなの驛路えきろでは、とてもそんな事ことは出來できません。そこでわたしは山やまの中なかへ、あの夫婦ふうふをつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ざうさくはありません。わたしはあの夫婦ふうふと途みちづれになると、向むかうの山やまには古塚ふるづかがある、その古塚ふるづかを發あばいて見みたら、鏡かがみや太刀たちが澤たくさん山さん出でた、わたしは誰だれも知しらないやうに、山やまの陰かげの藪やぶの中なかへ、さう云いふ物ものを埋うづめてある、もし望のぞみ手てがあるならば、どれでも安やすい値ねに賣うりり渡わたしたい、——と云いふ話はなしをしたのです。男をとこは何時いつかわたしの話はなしに、だんだん心こころを動うごかし初はじめました。それから、——どうです、慾よくと云いふものは、恐おそろしいではありませんか？ それ

から半時はんとぎもたたない内に、あの夫婦ふうふはわたしと一しよに、山路やまぢへ馬うまを向むけてゐたのです。

わたしは藪やぶの前まへへ來ると、寶たからはこの中なかに埋うづめてある、見みに來きてくれと云いひました。男をとこは慾よくに渴かわいてゐますから、異存いぞんのある筈はずはありません。が、女をんなは馬うまも下おりずに、待まつてゐると云いふのです。

又またあの藪やぶの茂しげつてゐるのを見みては、さう云いふのも無理むりはありません。まい。わたしはこれも實じつを云いへば、思おもふ壺つぼにはまつたのですから、女をんな一人ひとりを残のこした儘まま、男をとこと藪やぶの中なかへはひりました。

藪やぶは少しばらく時ときの間あひだは竹たけばかりです。が、半はん町ちやう程ほど行いつた所ところに、やや開ひらいた杉すぎむらがある、——わたしわたしの仕し事ごとを仕し遂とぐるのには、これ程ほど都合がふの好よい場所ばしょはありません。わたしは藪やぶを推おし分わけなが

ら、實は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謠をつきました。男  
 はわたしにさう云はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一  
 生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本  
 も杉が竝んである、——わたしは其處へ來るが早いか、いきなり  
 相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相  
 當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち  
 一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？  
 繩は盜人の難有さに、何時塀を越えるかわかりませんから、  
 ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、  
 竹の落葉を頬張らせれば、外に面倒はありません。  
 わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急

病やうを起おこしたらしいから、見みに來きてくれと云いひに行ゆきました。こ  
 れも圖星づぼしに當あたつたのは、申まをし上あげるまでもありますまい。女をんなは市  
 女ちめがさ笠がさを脱ぬいだ儘まま、わたしに手てをとられながら、藪やぶの奥おくへはひつ  
 て來きました。所ところが其處そこへ來きて見みると、男をとこは杉すぎの根ねに縛しばられてゐる、  
 女をんなはそれを一ひとめ目み見みるなり、何時いつの間まふところに懷だから出だしてゐたか、  
 きらりと小刀さすがを引ひき拔ぬきました。わたしはまだ今いままでに、あの位くらゐ  
 氣性きしやうの烈はげしい女をんなは、一人ひとりも見た事ことがありません。もしその時ときで  
 も油斷ゆだんしてゐたらば、一突ひとつきに脾腹ひばらを突つかれたでせう。いや、そ  
 れは身みを躲かはした所ところが、無二無三むむに斬きり立たてられる内うちには、どんな  
 怪我けがも仕兼しかねなかつたのです。が、わたしも多囊丸たじやうまるですから、  
 どうにかかうにか太刀たちも拔ぬかずに、とうとう小刀さすがを打うち落おとしまし



た。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縫りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。

## (陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷  
 な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔  
 を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見  
 ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち  
 殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、  
 —わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これ  
 はあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしそ  
 の時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を  
 蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわた  
 しの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い

藪やぶの中なかに、ぢつと女をんなの顔かほを見た刹那せつな、わたしは男をとこを殺ころさない限りかぎ、  
 此處ここは去さるまいと覺悟かくごしました。

しかし男をとこを殺ころすにしても、卑怯ひげふな殺ころし方かたはしたくありません。

わたしは男をとこの繩なはを解といた上うへ、太刀打ちたちうをしると云いひました。(杉すぎ

の根ねがたに落おちてゐたのは、その時捨ときすて忘われた繩なはなのです。)男をとこ

は血相けつそうを變かへた儘まま、太ふとい太刀たちを引ひき抜ぬきました。と思おもふと口くちも

利きかずに、憤然ふんぜんとわたしへ飛とびかかりました。——その太刀打たちう

ちがどうなつたかは、申まをし上あげるまでもありますまい。わたしの

太刀たちは二十三合目がふめに、相手あひての胸むねを貫つらぬきました。二十三合目がふめに、—

—どうかそれを忘わすれずに下ください。わたしは今いまでもこの事ことだけは、

感心かんしんだと思おもつてゐるのです。わたしと二十合斬り結むすんだものは、

てんか 天下にあの男一人だけですから。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、  
 をんなほう 女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處

にもゐないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、

すぎ 杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらし

い跡も残つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男

の喉に、斷末魔の音がするだけです。

こと 事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の

助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わ

たしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を

奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の

うまが、静かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、  
 無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはいる前に、太刀だけは  
 もう手放してゐました。——わたしの白状はこれだけです。  
 どうせ一度は檣の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極  
 刑に遇はせて下さい。（昂然たる態度）

## 清水寺に來れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふ  
 と、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどん  
 なに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中に

かつた繩目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思  
 はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうと  
 したのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しまし  
 た。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひや  
 うのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうの  
 ない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出で  
 はゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の  
 中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、  
 怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷た  
 い光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、  
 その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうと

う氣きを失うしつてしまひました。

その内うちにやつと氣きがついて見みると、あの紺こんの水す干かんの男をとこは、もう何處どこかへ行いつてゐました。跡あとには唯杉ただすぎの根ねがたに、夫をつとが縛しばられてゐるだけです。わたしは竹たけの落葉おちばの上うへに、やつと體からだを起おこしたな  
り、夫をつとの顔かほを見守みまもりました。が、夫をつとの眼いろの色いろは、少しもさつきと變かはりません。やはり冷つめたい蔑さげすみの底そこに、憎にくしみの色いろを見みせてゐるのです。恥はづかしき、悲かなしき、腹はらだ立たしき、——その時ときのわたしこころの心こころの中うちは、何なんと云いへば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立たち上あがりながら、夫をつとの側そばへ近ちか寄りしました。

「あなた。もうかうなつた上うへは、あなたと御ご一いちしよには居をられま  
せん。わたしは一ひと思おもひに死しぬ覺かく悟ごです。しかし、——しかしあ

なたもお死しになすつて下ください。あなたはわたしの恥はぢを御覽ごらんになりました。わたしはこのままあなた一人ひとり、お殘のこし申まをす譯わけには參まりません。」

わたしは一生懸命しやけんめいに、これだけの事ことを云いひました。それでも夫をつとは忌いまはしさうに、わたしを見みつめてゐるばかりなのです。わたしは裂さけさうな胸むねを抑おさへながら、夫をつとの太刀たちを探さがしました。が、あの盜ぬすびと人うばに奪うばはれたのでせう、太刀たちは勿もちろん論ゆみや弓ゆみや矢やさへも、藪やぶの中なかには見當みあたりません。しかし幸さいはひ小刀さすがだけは、わたしの足あしもとに落おちてゐるのです。わたしはその小刀さすがを振ふり上あげると、もう一度夫をつとにかう云いひました。

「ではお命いのちを頂ただかせて下ください。わたしもすぐにお供ともします。」



をつと 夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口  
 には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞え  
 ません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。  
 ませと 夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたし  
 は殆、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を  
 刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあ  
 たりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶え  
 てゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空か  
 ら、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みなが  
 ら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、——さうしてわたし

がどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力も  
 ありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつた  
 のです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、  
 いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、  
 これも自慢にはなりません。 (寂しき微笑) わたしのやうに腑  
 甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつた  
 ものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ご  
 めに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？ 一體わた  
 しは、——わたしは、—— (突然烈しき歎歎)

## 巫女の口を借りたる死靈の物語

— 盗ぬすびと人は妻つまを手てごめにすると、其處そこへ腰こしを下おろした儘まま、いろ  
 いろ妻つまを慰なぐさめ出だした。おれは勿もちろん論くち口きは利きけない。體からだも杉すぎの根ねに  
 縛しばられてゐる。が、おれはその間あひだに、何なんど度も妻つまへ目めくばせをした。  
 この男をとこの云いふ事ことを眞まに受うけるな、何なにを云いつても謊うそと思おもへ、——お  
 れはそんな意い味みを傳つたへたいと思おもつた。しかし妻つまは悄せう然ぜんと笹ささの落お  
 葉ちばに坐すわつたなり、ぢつと膝ひざへ目めをやつてゐる。それがどうも盗ぬすび  
 人の言こと葉ばに、聞きき入いつてゐるやうに見みえるではないか？ おれ  
 は妬ねたままに身み悶もだえをした。が、盗ぬすびと人はそれからそれへと、巧かうめ  
 妙うはなしすすに進すすめてゐる。一度どでも肌はだ身みを汚けがしたとなれば、夫をつととの  
 仲なかも折おり合あふまい。そんな夫をつとに連つれ添そつてゐるより、自じ分ぶんの妻つまに

なる氣はないか？

自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似

も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さ

へ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれは

まだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、

現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれ

は中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えな

かつたためしはない。妻は確にかう云つた、——「では何處へ

でもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今

程おれも苦しみはしまし。しかし妻は夢のやうに、盗人に手

をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あのひところ人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、——（突然迸る如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はち

つと妻つまを見みた儘まま、殺ころすとも殺ころさぬとも返へんじ事をししない。——と思おもふ

か思おもはない内うちに、妻つまは竹たけの落おち葉ばの上うへへ、唯ただ、一ひと蹴けりに蹴けた倒たふされた、

ふたたびとばしごと

てうせう

ぬすびと

しづ

りやううで

く

(再、逆さかる如ごとき嘲あざわら笑わ)

盗ぬす人は静しづかに

兩りやう

腕うで

を組くむと、おれ

すがため

の姿すがたへ眼めをやつた。「あの女をんなはどうするつもりだ？

殺ころすか、そ

れとも助たすけてやるか？

返へんじ事は唯ただ頷うなづけば好よい。殺ころすか？——お

れはこの言こと葉ばだけでも、

盗ぬす人の罪つみは赦ゆるしてやりたい。

(再、長

ふたたびなが

き沈ちん黙もく)

妻つまはおれがためらふ内うちに、何なにか一ひと聲こゑ叫こゑぶが早はやいか、忽たちち藪まの

奥おくへ走はり出だした。

盗ぬす人も咄とつ嗟さに飛とびかかつたが、これそは袖そでさへ

捉とらへなかつたらしい。

おれは唯ただ、幻まぼろのやうに、さう云いふ景け色しきを眺なが

めてゐた。

盗<sup>ぬすびと</sup>人は妻<sup>つま</sup>が逃<sup>に</sup>げ去<sup>さ</sup>つた後<sup>のち</sup>、太刀<sup>たち</sup>や弓矢<sup>ゆみや</sup>を取<sup>と</sup>り上<sup>あ</sup>げると、一箇<sup>か</sup>  
 所<sup>しよ</sup>だけおれの繩<sup>なは</sup>を切<sup>き</sup>つた。「今<sup>こんど</sup>度はおれの身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>だ。」——おれ  
 は盗<sup>ぬすびと</sup>人が藪<sup>やぶ</sup>の外<sup>そと</sup>へ、姿<sup>すがた</sup>を隠<sup>かく</sup>してしま<sup>とき</sup>う時<sup>とき</sup>に、か<sup>つぶや</sup>う眩<sup>くら</sup>いたのを覺<sup>おぼ</sup>  
 えてゐる。その跡<sup>あと</sup>は何處<sup>どこ</sup>も靜<sup>しづ</sup>かだつた。いや、まだ誰<sup>だれ</sup>かの泣<sup>な</sup>く聲<sup>こゑ</sup>  
 がする。おれは繩<sup>なは</sup>を解<sup>と</sup>きながら、ぢつと耳<sup>みみ</sup>を澄<sup>す</sup>ませて見<sup>み</sup>た。が、  
 その聲<sup>こゑ</sup>も氣<sup>き</sup>がついて見<sup>み</sup>れば、おれ自身<sup>じしん</sup>の泣<sup>な</sup>いてゐる聲<sup>こゑ</sup>だつたでは  
 ないか？ (三度<sup>みたび</sup>、長<sup>なが</sup>き沈<sup>ちん</sup>黙<sup>もく</sup>)  
 おれはやつと杉<sup>すぎ</sup>の根<sup>ね</sup>から、疲<sup>つか</sup>れ果<sup>は</sup>てた體<sup>からだ</sup>を起<sup>おこ</sup>した。おれの前<sup>まへ</sup>に  
 は妻<sup>つま</sup>が落<sup>おと</sup>した、小刀<sup>さすが</sup>が一<sup>ひと</sup>つ光<sup>ひか</sup>つてゐる。おれはそれを手<sup>て</sup>にとると、  
 一突<sup>ひとつ</sup>きにおれの胸<sup>むね</sup>へ刺<sup>さ</sup>した。何<sup>なに</sup>か腥<sup>なま</sup>い塊<sup>かたまり</sup>がおれの口<sup>くち</sup>へこみ上<sup>あ</sup>げて  
 來<sup>く</sup>る。が、苦<sup>くる</sup>しみは少<sup>すこ</sup>しもない。唯<sup>ただ</sup>胸<sup>むね</sup>が冷<sup>つめ</sup>たくなる、一層<sup>そう</sup>あた

りがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山まかげの藪やぶの空そらには、小鳥ことり一羽はえづ囀りに來ない。唯杉や竹の杪たなきぎに、寂さびしい日影ひかげが漂ただよつてゐる。日影ひかげが、——それも次第しだいに薄うすれて來る。もう杉すぎや竹たけも見えない。おれは其處そこに倒たふれた儘まま、深い静しづかさしづに包ままれてゐる。

その時とき誰たれか忍しのび足あしに、おれの側そばへ來きたものがある。おれはそちらを見みようとした。が、おれのまはりには、何時いつか薄うす闇やみが立たちこめてゐる。誰たれか、——その誰たれかは見みえない手に、そつと胸むねの小こ刀すがぬ抜ぬいた。同時どうじにおれの口くちの中なかには、もう一度いちど血潮ちしほが溢あふれて來る。おれはそれぎり永久えいきうに、中ちゆう有うの闇やみへ沈しづんでしまつた。……

：



(大正十年十二月作)



# 青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社  
1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月1日

※表題は底本では、「藪《やぶ》の中《なか》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 藪の中

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>